

コロナ乗り越え 響け歓喜の歌 ふくい第九を歌う会



「第九を歌おう 合唱のつどい」
2019年12月22日

ふくい第九を歌う会 代表 宮下一夫

福井市での「第九演奏会」は1975年から99年までの25年間毎年開催されましたが、一旦中止され、07年9月にハーモニーホールふくいの記念事業として開催されて以降、福井市で「第九演奏会」は開催されていませんでした。

しかし、暮れの12月に県都の福井市で「歓喜の歌」が響かないのは寂しいとの思いを共有した数名が、16年1月に発起人会を立ち上げ、17年に福井交響楽団(アマチュアで結成)とふくいの人たちによる第九演奏会の開催を目指すことになりました。

まずは、16年12月にピアノ2台で第4楽章「歓喜の歌」を歌う会を開催しました。一番の驚きは、6月に100名を目標に合唱団員を募集したところ、350名以上の方から応募があったことです。世代を超え、さまざまな人が一堂に会して「歓喜の歌」を歌い、また毎年、歌い続けることで、各合唱団の交流が盛んになり、さらに活性化してゆくことに驚きました。

福井交響楽団がアマチュアであることを踏まえ、全楽章の演奏会は3年から5年おきとし、その間はピアノ2台を中心として第4楽章「歓喜の歌」のみ、第一部はジュニア、中高生、一般の合唱団の演奏で「第九を歌おう 合唱のつどい」として企画しました。

以降、17年は福井交響楽団と、18、19年はピアノ2台を中心に続け、20年再び福井交響楽団と「ふくい第九」を計画しました。ところが、コロナ禍で20、21年と続けて中止せざるを得なくなってしまいました。合唱受難の2年間でしたが、いよいよ、本年12月18日(日)に「県民でつくる ふくい第九2022」にリベンジです。

この演奏会を「日刊県民福井」が取り上げ、次のようにエールを送っています。



禍で中止が相次ぎ、福井市でもここ2年間取りやめになった。3年ぶりの開催に向けた関係者の努力を心から応援したい。

県内で第九の演奏会が初めて開かれたのは1975(昭和50)年。ふくい第九を歌う会代表の宮下一夫さん(70)は「石川、富山に10年遅れてのスタート。当時は何とか福井で第九を、という思いでいっぱいだった」と話す。

福井市での開催は2007年を最後にいったん途絶えるが、16年に復活。19年まで4回開催したが、20、21年は中止となった。それだけに「歌いたい気持ちはもちろん大きい。でもそれ以上に、今年できなかつたら第九の灯が消えてしまう、という危機感が強いんです」と宮下さん。一人一人の情熱が復活させた「ふくい第九」だけに、歌えないことで参加者の心が折れてしまうのが心配だ、と言う懸念は当然だろう。

合唱は、コロナ禍の影響をまともに受けてきた。練習では音漏れの問題から部屋を締め切り、多くの人が一斉に声を出す。感染拡大の初期に岐阜県の合唱団でクラスターが発生したこともあり、「合唱は危ない」との空気が一気に広がった。

合唱愛好者に高齢の方が多く、その状況に拍車を掛けた。高齢者の重症化率が高いと指摘され、「歌いたいけど怖い」「歌いたいけど家族から止められた」という人も続出した。愛好者にとっては受難の2年間だった。

しかし、関係者の努力で状況は変わってきている。声を出す際のマスク着用はもちろん、練習の合間には小まめ換気している。歌っている時よりも休憩時の会話や飲食が問題だと分かり、その対策も進んでいる。今回の演奏会でもマスク着用で歌い観客席の一部にも合唱団員が立って十分に距離を取る工夫をしているという。

コロナを甘く見てはいけない。だが、恐れすぎたら、行き着く先は「何もしない」ことしかない。人はそれでは生きていけない。正しく恐れた上で、年末に「歓喜の歌」が声高らかに響き渡ることを心待ちにしている。

「日刊県民福井 5月28日 論説」より